

あ
と
が
き

各種の刷毛の用い始められた年代を極めんとして、先学の手引き、遺稿をたどつたが、的確な資料の入手が至難でその真髓をとらえ得ず、極めて抽象的であり、いたずらに脇役の説明に墮し、何んの変哲もない事を書き並べてきた。刷毛は、神武天皇の時代の丹塗矢より徳川末期迄の二千数百年間にわたつて、製品としての進歩はあつたにしても、他の工業面からの格別の要求もなかつた事によるのか、前代のものを受けつぐだけで、あたらしい息吹きらしきものもなく、悠々連綿として永い伝統の基盤に立つて、格別の変化もなく過ごして来た。それが、幕末、黒船の来航を契機に、刷毛とブラシ業界は飛躍的な進歩発展の途を辿るのである。

徳川三百年の泰平の夢は黒船来航の警鐘によつて遂に破れた。幕府も庶民も愕然としてなすところを知らず、周章狼狽をくりかえしたが、各国との通商条約の締結によつて、国内企業の様相は、漸次一変されていつたのである。

この時こそ、日本工業の黎明期というべく、国内のあらゆる工業は海外よりの移入により機械化に移行、これら機械に附属するブラシの補充は刷毛業者に求められ、これがわが国のブラシ業誕生の序曲であつた。始めて見る様式の変つたブラシ製作には、何の設備も持たぬ当時の刷毛業者として最高最大の技術を結集してもなお困難を極めたであらう事は想像にかたくない。

明治四年、兵制が布かれ、陸海軍は一般より一步先んじ各種のブラシを大量に発注した事もブラシ業者のその後の方向を指示するものであつたであらう。

安政条約の結果、我国に居留する外国人が持参する日用品の歯ブラシ、靴ブラシ、洋服ブラシ、ヘヤーブラシ等目新らしいものも登場して、わが国民生活も文明開化より更に近代化へ——和服、下駄、日本髪は洋服、靴、洋

髪と漸次変化を遂げ、産業の発展に生活の合理化に、ブラシ工業は益々発展の過程を辿るのである。

日本工業の発展に重要な役割を果たす交通機関は、鉄道、海運、更には馬車より自動車、飛行機と目まぐるしい発達を遂げるが、これらの製産にもその後の管理にも刷毛、ブラシが、常に重要な役割を果たしているのである。

当初海外品の模倣に始まったブラシ製作は、その需給の関係からブラシ製作専業としての移行が相ついで行われ、今や全くブラシと刷毛との製産に一線を画する程、明瞭な基盤を示すに至つた。更にまたブラシの種類に応じ多角製産より専門製産へと分離し製産の合理化は大きい変化を辿つて来たのである。かくして今や日本のブラシ製作の研究と技術は世界に比するもいささかも遜色なき水準に達しているのである。

しかし、このブラシ工業の発展も、その古い歴史をかえりみる時、古い時代より幕末期迄、黙々として刷毛製作の伝統をまもり続けて来た先人の遺業が、その母体となり基礎ともなつている事実を銘記すべきであろう。

刷毛の各種類中、多くは明治以後から作られたものであつて、それぞれ起源があるが歴史が浅いので時代的にはつきりしたものが多い。数え切れない程、種類の多いブラシにも、それぞれ起源があり極めて明瞭なものもある。

明治初期に発足し機械化されたブラシ刷毛に関係ある各種企業もその起源はだいたい明瞭であり探究すれば興味がある。

ブラシも刷毛も人間生活の身近に、しかもあらゆるものに働らいているのであるが、家庭用以外は蔭の機能であるので、ブラシへの一般の関心は極めて稀薄であるが、各種工業とブラシ刷毛との関係や機能の解明によつて、その存在意義が理解されればブラシも刷毛もより高く評価される事になるであろう。

過去の事蹟を只おぼろげに想像するに過ぎないという事は残念におもう。

江戸時代以後、ブラシ、刷毛の新しい種類の作られた始まり、ブラシ、刷毛に深い関連のある各種工業の起りとその時期やエピソードなど、つたない探究ではあるがこれらを、

ブラシ談義

としてまとめたいと思つている。

未筆ながら、本書の執筆にあたり御厚志をたまわりました今泉吉典先生、国分保先生、久保田良一先生をはじめとする、諸先生方に、深く御礼申上げます。

丹野 仲治